寄稿

ご愛顧いただき50年、そして100年へ

株式会社テレビ長崎
代表取締役社長　　宮　前　周　司

1952年12月　兵庫県尼崎市生まれ。
1977年3月　都留市立都留文科大学卒、　同年4月　関西テレビ放送㈱入社。
報道部の記者、ディレクター、デスクとして、国内外のドキュメンタリー取材、
阪神淡路大震災の取材などを担当。
その後、総務局長等を経て、2008年6月、同社、取締役、
2012年6月、同社、常務取締役、2016年6月、同社、専務取締役。
2017年6月より株式会社テレビ長崎、代表取締役社長。

テレビ長崎は、お陰さまで昨年、開局50周年を迎えることが出来ました。長崎県民の皆様に向けて最新のニュース、お役に立つ情報、ご家族一緒に楽しんでいただけるドラマやバラエティなどの娯楽をお届けして半世紀、この記念すべき50周年イヤーに奇しくも平成から令和へと時代をまたぐことになりました。

私たちは、この出来事を、歴史を踏まえつつも、新時代に向けて着実に歩を進めよというメッセージと受け止めています。

さてテレビ長崎は昭和44（1969）年４月１日に長崎県で２番目の民放テレビ局として産声をあげました。皆さんご存知ですか？　テレビ長崎の社屋は、維新の立役者の１人、後藤象二郎の旧邸跡に建っているんです。のちに三菱の創始者・岩崎弥太郎が譲り受けたという幕末、維新を見詰めていた由緒ある土地に拠点を構え、私たちの先輩は、新しい歴史を刻み始めたのです。

当時、先発のテレビ局がVHFの電波を使って放送していたのに対して当社は長崎県初のUHF電波を発信する局だったため、県民の皆さんにはテレビ受像機のほかにコンバーターという付属機器を購入していただかないとご覧いただけなかったことから、開局時の社員たちは、スポンサーの皆様にCMを買っていただく前に、視聴者にコンバーターを買っていただくようお願いしてまわったという逸話も残っています。また初のUHF局ということで、当時の県民の皆様からは「U（ユー）、U（ユー）」と呼んで可愛がっていただいたとも聞いています。

開局から20年ほどはフジテレビ系列と日本テレビ系列の両方の番組を流しておりましたので、フジテレビのお昼の名物番組「笑っていいとも」を夕刻に放送するなど番組編成にも苦心をしておりました。夕方４時に「お昼休ぁ～すみは、ウキウキウォッチング…」と

いうあのテーマ曲をお聞きになった方もいらっしゃると思います。

その後、平成の時代に入ると新たに２つのテレビ局が開局、長崎に民放４局時代が訪れ、今日に至っています。

この間、テレビ長崎では、世界一の造船所・三菱の香焼工場の竣工、長崎空港の開港などの経済ニュース、300人近い犠牲者を出した長崎大水害、雲仙普賢岳の大火砕流などの災害、バスジャックや本島、伊藤両市長の狙撃など数々のニュース、そしてトレンディードラマと言われ一世を風靡した「月９」などのドラマ、「スマスマ」などの人気バラエティを県民の皆さんにお送りしてきました。

現在の役員の１人は長崎大水害の年に入社、当日は夕刻から浜町のビルの地下にいて気がつけば扉の外に水が迫っており、偶然近くにいた設備工事の関係者に救出され九死に一生を得たと語っています。

近年では、午前帯の「めざましテレビ」や「とくダネ！」、午後帯の「バイキング」やスタートから６年目を迎えた情報番組「ヨジマル！」、夕方ニュース「Live News it！」、夜には週に３作品が編成されているドラマや「ネプリーグ」、「VS嵐」、深夜では、クロちゃんが県内を巡り皆さんと触れ合う情報バラエティ「パシれ！メロス」などの多彩なバラエティを楽しんでいただいています。

さて過去、現在のお話はこれくらいにして、ここからは未来に向けてのお話をしたいと思います。50周年にあたり当社では100周年に向けてのワーキンググループを立ち上げ、新たなテレビ長崎像を視聴者の皆様にみていただきたいと考えました。そこで若手中心のメンバーがいろいろと智恵を絞ったのです。

新たなテレビ長崎像を作るにはまず現状認識から。今のテレビ長崎を皆さんにどうのようにご覧いただいているかも調べてみました。

例えば「アルファベットの略称が長崎で唯一、Ｎから始まらないテレビ局」。そうなんです。テレビ長崎の略称はKTN、NHKを含めて他の４局は全てＮから始まってますよね。KTNは何故、KTNか？　そう、「か」ぶしきがいしゃ「て」れび「な」がさきの「か」、「て」、「な」をアルファベット化したのでKTN。な～んだと思われるかもしれませんが、NHKさんだって「にっぽん　ほうそう　きょうかい」の略なんですからご容赦ください。

グリーンに赤のシンボルマークはかなり知っていただいている。マスコットキャラク

ターの「けーたん」は…、う～んいささか影が薄い、などなど。そんな中から「テレビ長崎は「ちょっと大人しい」というイメージをもたれていることが分りました。

そこで若手のメンバーが考えたのが、この際、思い切って「ハッチャケてみよう」、「皆さんに元気一杯のテレビ長崎を見ていただこう」というキーコンセプトが決まりました。ではどうやって？元気一杯、ハッチャケを表現するか？　そのためには、シンボルとなる「何か」が必要という結論が出て、「はっちゃＫもの」という新キャラクターの誕生となりました。ハッチャケたケモノ？、はっちゃけ者？、お馴染みKTNのチャンネルである数字の「８」のような形をした大量の毛で覆われた未確認生物、性別・年齢とも不明、明るく無邪気ですぐ踊る新キャラクターの登場です。

すぐさまこの「はっちゃＫもの」を先頭に元気一杯なテレビ長崎をご覧いただこうというミッションが始まりました。まずはスタッフ総出で「はっちゃＫもの」を使った開局50周年キャンペーンCMの作成。沢山のスタッフが声で出演、視聴者の皆様にもご協力をいただき、私まで２バージョンほど参加することになりました（お恥ずかしい）。この文章をお読みいただいている皆さんの中にも「ハッチャケ、ハッチャケ、ケッケッケッ」という賑やかなテーマ曲がKTNのテレビから流れてくるのをお聞きいただいた方もいらっしゃるかも。

テレビ長崎100年に向けての活動はこればかりではなく、中長期の経営計画策定や記念番組、記念イベントの開催などもちゃんと計画しておりますが、次の時代を担う若手によるこの取り組みが50周年事業の核になったのは間違いありません。テレビ長崎はこれからも「元気」、「ハッチャケ」をキーワードに長崎県民、視聴者の皆さんに可愛がっていただけるように明るく頑張っていきたいと考えています。

テレビというメディアは、スタートしてから数十年の間、最新のニュースとドラマやバラエティなどの楽しい娯楽作品を映像と音声でお茶の間にお届けする唯一のメディアとして皆さんに受け入れていただきました。しかし最近ではインターネット、SNS、動画配信などの発達によって、多くの選択肢の中の１つとなりました。部屋にテレビモニターがあっても映っているのはゲームだったり、配信された映画だったりという時代はもう目前にきています。私たちテレビは大きな過渡期を迎えています。でも過渡期にあるのはテレ

ビばかりではありません。例えばカメラからフィルムがなくなってデジタルカメラになり、いまやスマートフォンで鮮明な動画も静止画も撮影できる時代です。また音楽の分野では、レコードがCDに取って代わられ、今またCDが配信へと移行しています。こればかりでなく今や全ての企業が、社会が、過渡期を迎えているといっても過言ではないでしょう。そうした激変期を乗り越えられた企業、そうでなかった企業、そこにはどのような違いがあったのでしょうか？

私はテレビ長崎の社長に就任してから沢山の企業の経営トップの方々とお目にかかる機会をいただきました。そして様々な形で貴重なご指導をいただくことが出来ました。そうした中で印象に残ったのは優れた経営者の皆さんが必ずと言っていいほど「ユーザーファースト」の考え方を大切にしていらっしゃることでした。伝統を積み重ねた老舗企業であっても、自分本位、手前勝手にならず、伝統ある技と経験を活かしつつも、お客様は何を求めているかを丁寧に探り出し、いかにすれば喜んでいただけるかを研究し、お客様にとって何が一番大切なのか、を見極め、そのニーズに添った商品を開発したり、売り方を改革したり、どうすればニーズに応えられるかを常に考えていらっしゃいました。

前述したようにテレビはかつて「唯一のメディア」だった時代が長く続いておりました。そうした状況にあって私たちは傲慢であったのではないか、視聴者の皆さんに対してこちら側の価値観を押し付けていなかったか、視聴者の皆さん、スポンサーの皆様方に本当に喜んでいただいていたか、50周年を迎えた今、私たちはしっかりとそれを検証するつもりです。

では100年を目指す次の50年、私たちは何を目指すか。

それは長崎の発展と繁栄しかありません。長崎は今、かつての隆盛を支えた基幹産業の構造変化などにより、大きな転換期を迎えています。交流の産業化など観光、インバウンドによる経済の活性化を図っていますが、過渡期の只中にあって人口流出に歯止めがかからず、特に長崎市の人口減少は全国のワースト１に挙げられるほどの状況です。

こうした時期だからこそテレビ長崎は、50年にわたって可愛がっていただいた視聴者、すなわち県民の皆さん方とより近くにありたい、さらに強く結びつきたいと考えています。そして県内全てにあまねく情報を発信出来るテレビというメディアの責任を果たして参りたい、長崎を活性化したい、元気一杯にする情報を発信したい、そして長崎を盛り上げるムーブメントを起こしたいと思っているのです。

2017年の夏からKTNでは「Love baby（ラブベイビー）」というキャンペーンをスタートさせました。この取組みは、長崎で生まれてくる全ての赤ちゃんが健康にすくすくと育ってくれるようにという願いを込め、赤ちゃんの生まれたご家庭からご応募いただき、その全ての皆さんに様々なグッズを入れた「はじめて箱」をプレゼントするというものですが、それだけでなく自治体や医師、助産師、保健師、看護師など各界の方々の協力を

いただき、長崎を日本一子育てのし易い県にすることを目標にしています。

さらに赤ちゃんがすくすく育つ幸せな家庭を築くにはまず若者の長崎定着が必要であるとして今年度からはより視野を広くして「長崎　はぐくむ未来」のキャンペーンへと取組みを広げています。

若者の県内定着、長崎でモチベーション高く働ける企業への就職、素敵な出会いと結婚、そして出産、さらに子育て、教育と長崎県民の皆さんを丸ごと包み込むような大きな活動に展開していきたいと考えているのです。

令和新時代、長崎では新幹線の開通、それにともなう長崎駅前の再開発、MICEの開業が間近です。またジャパネットスタジアム計画、IR構想のほかにも県北地域、島原など各地で様々な取り組みが胎動しています。

社会全体を俯瞰すれば、来年には56年ぶりに東京オリンピックが開催され、2025年には関西万博の開催が予定されています。1960年代、70年代、日本の高度経済成長のシンボルとなった２つのビッグプロジェクトの再来に多くの人たちが新たな変革を期待するでしょう。またAIやロボティックス、ドローン、車の自動運転などの技術が急激な発達を遂げて製造、流通の世界に革新をもたらそうとしています。さらに来年は「５Ｇ元年」と言われ通信の世界でも革命的な変化が訪れそうな気配です。

そうした変革の中でテレビ長崎は、次の50年への道を歩き始めました。環境が目まぐるしく展開していく時代だからこそ、私たちはしっかりと視線を定め地域と人々とともに進んで行きたいと思っています。前述した「Love baby」、「長崎はぐくむ未来」のキャンペーンだけでなく、コンテンツ制作、イベント開催など、あらゆる機会を捉えて、視聴者、県民の皆さんとより近く、より強く結びつき、長崎を盛り上げるため全力をあげていきたいと考えています。新キャラクター「はっちゃＫもの」も画面だけでなく、街に飛び出し皆さんにお目にかかりに行きますよ。その時にはお気軽に声をかけてくだいね。

愛していただき50年、そして令和新時代、KTN・テレビ長崎は、次の時代を皆さまとともに歩む50年にしたいと思っています。どうかこれからもご愛顧いただくとともに、ご指導賜りますように。よろしくお願い申し上げます。